

第 15 回日米戦史交換研究会の概要

立 川 京 一

日米戦史交換研究会（以下「MHX」という。）は、戦史研究に関し日米双方の視点で考察し、より正しく史実を認識する事により、爾後の戦史教育・研究の資を得るとともに、戦史教官の能力向上を図る事を目的として、1984（昭和 59）年からはじまり、今回で 15 回目の開催であった。（文末にく過去の MHX 共通テーマを掲載した。）MHX は、二年毎に日米交互に開催し、今回は米国での開催であり、米陸軍歴史センターが運営を担当した。

今回の共通テーマは「ゲリラ・対ゲリラ作戦、治安維持作戦、武装解除、復員等」であり、日本側からは、防衛研究所から立川主任研究官が参加したほか、陸上自衛隊幹部学校戦史教官室長・長峰 1 等陸佐、同室教官・葛原 1 等陸佐、齋藤 2 等陸佐、海上自衛隊幹部学校第 4 研究室研究部員・石田 2 等海佐、防衛大学校防衛学教育学群准教授・山口 3 等陸佐が参加し、研究発表は立川主任研究官、齋藤 2 等陸佐、山口 3 等陸佐が実施した。

米国側は、陸軍歴史センター長クラーク博士を筆頭に、副センター長スピネリ大佐、先任歴史研究官ステュワート博士、先任歴史研究官補佐ショータル博士、フィールド・プログラムおよび歴史業務部長デーヴィス博士、国際交流担当長ラッシュ博士、歴史研究官エプレー氏、同カーニー博士、国防総省歴史研究官ドレイ博士、海軍歴史センター先任歴史研究官マロルダ博士、空軍特殊部隊司令部歴史研究官メイソン氏、海兵隊戦史教官ロット氏らが参加し、研究発表は陸軍歴史センターのホーガン博士、前出のラッシュ博士、海軍歴史センターのバーロー博士、空軍特殊部隊司令部歴史部門のバーガロン氏が実施した。

各研究発表のタイトルは次のとおり（発表順）。

- ① 立川主任研究官「仏領インドシナにおける日本軍の作戦（1945年）」
- ② バーガロン氏「空軍特殊作戦部隊－10年間の衰退からの教訓 1970-1980－」
- ③ 齋藤 2 等陸佐「満州における関東軍の治安戦－満州国の内なる対ソ戦－」
- ④ ホーガン博士「対日戦争におけるマッカーサー、スティルウェル、および特殊作戦」
- ⑤ バーロー博士「太平洋戦争における米国海軍水中破壊部隊の役割」
- ⑥ 山口 3 等陸佐「アジアにおける米軍駐留に関する諸問題の歴史－地位協定を中心に－」
- ⑦ ラッシュ博士「湾岸地域師団およびイラク再建」

日本側の研究発表は英語で行ったが、米国側の発表及び質疑応答には逐次通訳がついたため言語の問題もなく（米国側の論文は日本語に翻訳されたものと英語のオリジナルが配布された）、活発な意見交換等が実施でき大変有意義な研究会であった。

戦史現地研究は南北戦争の激戦地であるマナサス戦場及び軍事博物館である海軍博物館（ネイヴィー・ヤード）、スミソニアン航空宇宙博物館（本館・別館）を見学した後、現在、設立の準備を進めている陸軍博物館の設立準備状況を視察した他、米陸軍歴史センターと米陸軍訓練ドクトリン・コマンドにおける教育・研究業務についてブリーフィングを受けた。

MHX では、毎回、共通テーマに基づき日米参加者が最新の研究成果を持ち寄り発表、質疑応答、意見交換等により研究レベルの向上が図られているが、MHX に対する研究発表のテーマの内容から米国側の軍事史研究に対する姿勢を会得するとともに、日本側の研究成果を発表することによって、日本の歴史認識を米国側に伝えることができた。

研究発表以外に計画される戦史現地研究や軍事博物館見学等は軍事史に関する知識を広め、相互理解を深める有意義な機会であったことから、あらためてMHX の存在の重要性について認識した次第である。次回のMHX は2009（平成21）年3月に陸上自衛隊幹部学校が担当し、「20世紀の軍事理論」を共通テーマに開催が予定されている。

（防衛研究所戦史部 主任研究官）

<過去のMHX 共通テーマ>

名称	M H X 8 4	M H X 8 5	M H X 8 7	M H X 8 8	M H X 9 0	M H X 9 2	M H X 9 4	M H X 9 6	M H X 9 7	M H X 9 9	M H X 0 0	M H X 0 1	M H X 0 3	M H X 0 5
主催	米 国	日 本	米 国	日 本	米 国	日 本	米 国	日 本	米 国	日 本	米 国	日 本	米 国	日 本
共通テーマ	太平洋戦争関連	沖縄作戦	日本本土防衛作戦	比島進攻作戦	戦史の役割	統率	太平洋正面作戦	沖縄作戦	サイパン島作戦	太平洋作戦兵站	統連合作戦	統連合作戦	統連合作戦	統連合作戦